

生を費した自然科学の研究が、グロステストの思索と行動の骨格を成していたことになる。我々は、本書に描かれるグロステストが McEvoy の研究書におけるグロステスト像と全く対照的であることに驚かされるのであるが、最後に著者は、グロステストにとって学問的孤立は宿命的であり、グロステスト自身の内部に含まれる矛盾のために、これまでグロステストを理解したと信じて来た人々も、必ず何らかの本質的要素を見逃して来たし、自分の著書の内容についても、果たしてグロステストが賛同するかどうか疑わしいと書いている。McEvoy と Southern のように全く対照的なグロステスト理解が可能であるということ、このことはグロステストの本質的独自性とかかわっていると我々は考えるべきなのかもしれない。

---

Mark D. Jordan: *Ordering Wisdom. The Hierarchy of Philosophical Discourses in Aquinas.*

University of Notre Dame Press, 1986, pp. xvii+297

稲垣良典

「トマスの著作はいかに読むべきか？」一見、この問いには容易に、確信をもって答えることができそうに思われる。たしかに真・偽作が未詳であったり、著作年代について意見のわかれるもの（とくに近年『対異教徒大全』に関して P. Marc 説がひき起した論争を参照）もあり、まだ批判版が刊行されていない著作も多い。しかし、神学の総合的論述、討論集、聖書注解、アリストテレス注解、等、それぞれの著作様式を考慮しながら読むならば、文体は極めて単純明晰であり、そのすべてにトマスの「教える人」としての配慮が行きとどいている。その結果として、かれが言おうとすることを理解するのは通常それほど困難ではない。「プラトン対話篇はどう読まれるべきか？」という問いにくらべるとき、冒頭の問いはかなり容易に答えることができるのではないか。

けっしてそうではない、というのがトマスにおける「哲学的説話の本質」を<sup>グイヌコス</sup>あきらかにしようとする本書の主張である。著者によると、トマスの著作は読者にたいして

「秘められた」多大の努力を要求する。とりわけ読者にたいしては特定のテキストにおいてトマスが行っている探求の限界を見てとる、という要求が課せられるのであるが、トマスが著作するさいに守っていた慣習が消去されてしまっている上、デカルト以後の哲学の歴史と、「ネオ・トミズム」の影響下にトマスの著作に近づく今日の読者にとっては、この「限界」はほとんど不可視となっている、というのである (xiii)。

著者によると、トマスにおいて哲学の限界は(4)神学的教説、および(5)人間的知性が諸諸の知的実体のなかで占める最低の位置、によって明確に確定されており、したがって哲学的説話は限界づけられると共に、準備的な性格をおびざるをえない。しかし、トマスにおいて特徴的なのは、哲学的説話がこのように未完結・不完全でありながら、同時に一個の学問として成立するのに適切にして充分 *adequate and sufficient* なものと見なされていた、という点であり、そのことを可能にしたのは哲学についてのかれの「教育者的見方」である、と著者は論じている (xiii-xiv)。いいかえると、哲学的探求は前述の限界からして未完結にとどまらざるをえないが、その位階的構造の全体が啓示において約束されている(哲学の完成としての) 智恵へと(教育的見地から) 秩序づけられたものとして捉えられるとき、適切にして充分なものと評価されることが可能となる、というのである。

本書の論述は次の順序で進められている。第一部「哲学的説話の諸要素」の最初の章ではトマスの説話理論の最も一般的な側面、すなわち哲学的な言語理論を構成する要素としての言葉と記号をトマスがいかに理解していたかが考察される。第二章ではトマスが三学 *trivium* をどのように修得していたかをふりかえることを通じて、トマスの哲学的な言語および説話理論においてこれら三学の教養がどのような影響を与え、どのような役割を果していたかが詳しく考察されている。

第二部「哲学的説話の適例」は本書の主要部分であり、それを構成する三つの章はそれぞれ理論学の三つの領域ないし位階——自然学、靈魂論、形而上学——においてトマスが実際に行っている哲学的説話の検討にあてられている。ここで当然、著者はなぜトマスが『ポエティウス三位一体論註解』においてのべている理論学の区分——自然学、数学、形而上学——にもとづいてトマスの哲学的説話の三つの位階に関する論述を進めないのか、という疑問が起るであろう。

この疑問にたいする著者の解答は極めて明快である。すなわち理論学の位階秩序は

「(質料からの) 抽象ないし分離の論理」からの帰結以上のものであり、人間知性の開発教育の順序に対応している (115)。靈魂論 (心理学) は抽象の順序においては数学の位置を占めるものではないが、アリストテレスにおいてと同じく、トマスにおいてそれは自然学よりもより高度で複雑な可知性を有するのである (117)。ここで著者はトマスの心理学を主として人間知性 (精神、靈魂) による自己認識の営みとして捉えていることに注目する必要がある。それは自然学における (人間知性の下に位置する) 質料的事物の (因果性にもとづく) 認識に続く認識段階であり、形而上学における (質料から) 分離された存在、ないし非質料的な諸実体の認識へとひきつがれるのである。

第五章「第一の諸原理に関する説話」の後半においてトマスの神名論が考察されるが、これは著者によると哲学的思惟の最高頂であると同時に、神学的思惟の最底辺であり、神名論をもって哲学的説話の類型学は完結することになる (xvii)。ここで著者は自然学、心理学 (靈魂学)、形而上学という哲学的説話の位階秩序にたいして三学が逆の順序で対応していることを次のように指摘する。「自然学は諸原因を中項として解明しようとするその関心において高次の論理学である。心理学は自己言及のための手段を探索するその営みにおいて高次の修辞学である。最後に、語られうることがらを超越する事物についての説話として、形而上学は最終的文法学、すなわち事物がいかにして名付けられうるかについての省察である」(177, cf. 83)。

第三部「哲学的原作者の問題」においては、トマスにおける哲学的説話が未完結であり、(境界を確定しがたい仕方) 神学的説話へと連続するところから、哲学的説話の「著者」としてのトマスが問題にされる。それはいうまでもなく、通常の意味での著者同定の問題ではなく、より哲学的な問題——「(或る著者のものと同定された著作群の種々の部分にたいして、つまるところ著者はどのように関係づけられるのか? 著者はかれ自身の著者としての資格をどのように捉えていたのか?)」(183) ——である。この問いはトマスが人間的知性および哲学の限界を強く自覚していたことのゆえに、緊急かつ切実な性格をおびる。したがって、トマスは哲学的著作に従事することで何を成就できると考えたのか、と問うことはトマスの著作を読むにあたって避けることのできない問いである。こうして、われわれは最初の問い——「トマスの著作はいかに読むべきか?」——に帰ることになる。

本書の全体を通じて数多くの興味深い問題提起や重要な指摘、優れた解釈が見出され、

以下触れることができるのはその一部にとどまる。まず、トマスと修辞学との間には一見ほとんどかわりがないように思われるが、著者によると、たとえばトマスの註解著作のうちには顕著な修辞学的配慮が認められる (60) のであり、また正規討論集のうちには修辞学の法廷弁論的性格が再登場している (61)。たしかに「討論」は協働的な真理探求のために考案され、仕上げられた制度であるが、そのことは修辞学的要素を排除するものではない。トマスは「討論」が理性的説得によって疑問点に決着をつけることをめざすものであること、そして哲学的議論は「修辞学」の古い定義に即して、根本的に修辞学的であることを確信していた、と著者は論じている (67)。

自然学の領域におけるトマスの哲学的説話は、自然の諸原因そのものの発見よりは、むしろそのような原因発見と哲学的探求との結びつきにかかわるものであり、その意味でかれの主たる関心は論理的および認識論的であった (89, 91)。すなわち、トマスは諸原因に関する哲学的説話の可知性の根拠に関心を集中させていたのである (91)。いかえると、諸々の原因なるものは世界についての生の<sup>な\*</sup>感覺的知覚によって与えられる事物ではなく、世界についての(自然学的論証において完結せしめられるような類いの)説話の特徴 features をなすものであった、と著者は指摘する (100)。

ところで、トマスによると自然の諸原因の探求は第一原因の因果性、すなわち(神的)創造へと到達するまでは完結しないものであるから、かれにとって自然学において獲得される諸原因についての知識はけっして人間の思考にとっての安息の場とはなりえないものであった。日常経験においてわれわれが諸々の原因について与える説明はすべて自然学を超えて投影されるのである (111)。したがって、トマスにおいては自然学的説話の最終的意義は自然そのものを解明することよりは、むしろこの種の説話の未完結性を示し、より高次の可知性にかかわる探求への道を開くことにあった、とされる (113)。

トマスの心理学・靈魂論は人間的認識に関する説話を含んでいるが、それはけっして意識主体が自らの思考・認識の真实性について確信をうるための根拠を探求する、という意味での認識論ではなかった、と著者は指摘する (118-119, 121-122)。むしろトマスは物質と精神、時間と永遠の切点に位置する受肉した知性の働きを解明しようと試みているのであって、心理学的探求は常に宇宙の位階秩序における存在論的段階の研究という枠組によって規定されている (119)。この観点から著者は、たとえば『真理論』第一

問題第九項をトマス認識論の基本テキストとして解釈しようとする試み（クロイトゲン、メルシエ、マレシャル、ポワイエ、ヘーネン、ロナーガン）を批判している。

トマスの形而上学的説話に関しては、当然のことながら著者は「分離」*separatio*、すなわち「存在」*esse* がそれによって捉えられるとされる否定判断を詳細に考察する。ここで注目に値するのは、「抽象」から明確に区別された「分離」はトマスの基本的な形而上学見解なのか否か（156-158）、さらに「分離」のうちにふくまれる二種類の否定判断の間の相互関係についての（159-163）著者の議論である。

第三部における著者の議論は、ラテン語 *auctoritas* が「権威」を意味すると同時に「著者 *auctor* たること」をも意味しうることによって興味深いものになっている。トマスはデカルトとは対照的に、自らを本質的な仕方では哲学的伝統のうちにおきつつ哲学的探求を行っているのであり、そこで「権威」をもつのは「著者」たるトマス自身であるよりは、むしろ哲学的伝統である。しかし、それはけっして最終的権威ではなく、啓示ないし至福へと教導する役割を果すかぎりでの権威にとどまる（189）。「哲学の人間の権威（著者たること）は神学の始まるところで神的著者・権威によって置きかえられる」（201）のである。

ヨゼフ・ビーバーはかつてトマスの文体の極度の明澄さと客観性を評して、その著作の背後にいるトマスを認識できないほどだ、とのべた。これにたいして本書の著者は「教える人」トマスに注意を集中することによって、哲学的説話の「著者」トマスをうきぼりにすることを試み、そのことに成功しているといえる。トマスの著作に親しむと同時に、現代の解釈学や言語哲学にも通じている著者は、本書によってトマス研究に新風を吹きこんだといえることができるであろう。

---